

佐藤隆広准教授が第1回日本南アジア学会賞を受賞されました

2007年10月上旬に本学で開催された日本南アジア学会において、経済学研究科の佐藤隆広准教授が第1回南アジア賞を受賞されました。同賞は、南アジアに関する研究を奨励するために、南アジアに関するとくに優れた研究業績を発表した若手の研究者に授与されるものです。受賞の対象となった佐藤准教授の作品は、『経済開発論：インドの構造調整計画とグローバリゼーション』（世界思想社、2002年）です。

佐藤准教授に、受賞作品を紹介する文章をお寄せいただきましたので、これを以下に掲載させていただきます。

拙著について

佐藤隆広

『経済開発論：インドの構造調整計画とグローバリゼーション』（世界思想社、2002年）のなかで、わたしが試みようとしたことは、1991年からスタートしたインドの経済改革に関する全般的にかつ批判的な検討であった。

「全般的」というからには、インドの経済改革の3本柱である構造調整政策・経済安定化政策・セーフティネットのいずれにも目配りする必要があると考えた。本書の第1部「構造調整政策」では、資源配分の歪みを是正するために実施された規制緩和・税制改革・貿易自由化などを検討している。第2部「経済安定化政策」では、マクロ経済の不均衡を是正するために行われるマクロ経済政策を検証するために、金融政策・資本自由化・マクロ経済政策全般を分析している。第3部「セーフティネット」では、1980年代の貧困緩和計画と1970年代以降の農村労働市場の変化を検証したあと、1990年代以降のセーフティネットの諸問題を議論している。もちろん、わたし一人で研究を行ったものであるため、公企業改革・労働法制改革などの分析や個別産業に関する分析などを欠落させているが、1990年代の経済改革における主要な論点は抑えたつもりである（V. Joshi and I.M.D Little, *India's Economic Reform 1991-2001*, Oxford University Press, 1996 が本書に先行する最重要な研究書であるが、わたしは、彼らがカバーした論点のほとんどを独自に分析した）。多角的な観点から、インドの経済改革に切り込んでいるのが本書の特徴のひとつである。

「批判的」ということの意味は、インドの経済改革に関する既存研究の徹底した整理の上に立って、制度と数量の両面からインドの経済改革を実証的に分析した、ということである。インドの経済改革の「非難」では決してない。これまでのインド経済論の多くは、制度分析や歴史分析を得意としてきたこともあり、本書もその伝統を一部引き継いでいる。しかしながら、これまでのインド経済論で不十分であった数量分析（計量経済分析）を本書では本格的に取り組んでいる。数量分析を行うことで、これまでのインド経済論においてしばしばみられる「曖昧さ」を排除し、論旨をより明確化した。

本書の学術的な貢献は、第 1 に、インドの経済改革の各領域を多角的な角度から制度分析と数量分析の両方を用いて分析したこと、第 2 に、資本自由化を明示的に取り上げて、インドの経済改革とマクロ経済の問題を明らかにしたこと(本書の第 3 章から第 6 章までは結局、資本自由化がもたらすマクロ経済政策の矛盾が主題であった)、第 3 に、数量分析の手法として、当時としては最先端であった「共和分分析」を用いたこと(第 3 章)、第 4 に、これまであまり知られてこなかった経済改革に関する政策文書を解説し、インド国内における論争を整理して紹介していること(第 1 章・第 2 章・第 7 章・第 9 章)、第 5 に、農村貧困問題にあたって農業労働市場の動向に注視し、インドにおいても成長が貧困を削減することを数量分析によって実証したこと(第 8 章)、以上、5 点にとりまとめることができるように思う。

最後に。現在のわたしは、本書を出発点にして、インド経済研究をより一層深めています。職業研究者としての出発点を、日本南アジア学会の会員の方々に評価していただき、大変感謝しております。